

有田・小田部 46

— 第 226 次調査報告 —

2009

福岡市教育委員会

有田・小田部 46

—第226次調査報告—



遺跡略号 ART-226

調査番号 0735

2009

福岡市教育委員会



1. 調査区全景（東より）



2. 掘立柱建物群（西より）



1. SC44 (北より)



2. SC37 (南東より)

序

玄界灘に面する福岡市は、古くから大陸との文化交流の玄関口として発展してきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されており、本市におきましてはこれらの保護と活用に取り組んでいるところであります。

しかし、近年の都市開発によって貴重な先人の足跡が失われていることも事実です。本市教育委員会では開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、その記録保存に努めています。

本書は、早良区小田部2丁目において実施した有田遺跡群第226次調査の成果を報告するものです。今回の調査では弥生時代から古代の集落跡が確認されました。これらは、当時の小田部地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、地権者をはじめとする多くの方々の御理解と御協力を賜りました。ここに心から謝意を表します。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　言

1. 本書は早良区小田部2丁目139・140・141・141-1・142・144において発掘調査を実施した有田遺跡群第226次調査の調査報告書である。
2. 本書で用いた方位はすべて磁北である。
3. 本書で使用した遺構の呼称は、掘立柱建物をSB、竪穴住居址をSC、土坑をSK、ピットをSP、不明遺構をSXと略号化している。
4. 本書に掲載した遺構実測図の作成は今井隆博が行った。
5. 本書に掲載した遺物実測図の作成は板倉有大、米倉法子が行った。
6. 本書に掲載した挿図の製図は長家伸、板倉、米倉、副田則子、今井が行った。
7. 本書に掲載した遺構・遺物の写真撮影は今井が行った。
8. 石器については板倉有大氏の御教示を得た。
9. 本書に関わる遺物・記録等の全資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
10. 本書の執筆・編集は今井が行った。

本文目次

第1章 はじめに.....	1
1. 調査に至る経緯.....	1
2. 調査の組織.....	1
第2章 遺跡の立地と環境.....	2
第3章 調査の記録.....	6
1. 調査の概要.....	6
2. 造構と遺物.....	6
第4章 まとめ.....	14

挿図目次

第1図 有田遺跡群と周辺の主な遺跡 (1/25000).....	3
第2図 有田遺跡群調査地点位置図 (1/8000)	4
第3図 調査区位置図 (1/800).....	5
第4図 調査区全体図 (1/150).....	折込
第5図 SB01・12・13・104 実測図 (1/60)	7
第6図 SB105・106・107 実測図 (1/80)	8
第7図 SB108・109 実測図 (1/60).....	9
第8図 掘立柱建物出土遺物実測図 (1/3).....	9
第9図 SC37・38・45 実測図 (1/60)	10
第10図 SC44 実測図 (1/60)	11
第11図 竪穴住居址出土遺物実測図 (1/3).....	11
第12図 SK09 実測図 (1/40)	12
第13図 ピット出土遺物実測図 (1/3)	12
第14図 出土石器実測図 (1/3, 1/1)	13

図版目次

卷頭図版 1

1. 調査区全景（東より） 2. 掘立柱建物群（西より）

卷頭図版 2

1. SC44（北より） 2. SC37（南東より）

図版 1

1. 調査区東半全景（北より） 2. 調査区西半全景（北より）

図版 2

1. SB01 完掘状況（北より）
3. SB13 完掘状況（北西より） 2. SB12 完掘状況（北より）

図版 3

1. SC37（東より） 2. SC38 ベルト土層（北より）
3. SC38 貼床検出状況（北より）

図版 4

1. SC38 炉（西より） 2. SC44 完掘状況（南東より）
3. SK67 ピット検出状況（南より）

図版 5

1. SK67 完掘状況（南より） 2. SC45 完掘状況（南より）
3. SK09 完掘状況（北西より）

図版 6

- 出土遺物

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

平成19年6月12日、大和ハウス工業株式会社より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課（以下、埋文1課）に対して、福岡市早良区小田部2丁目139・140・141・141-1・142・144における建設工事に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。これを受けて埋文1課では、申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である有田遺跡群に含まれていること、北側および東側の隣接地において発掘調査で遺跡が確認されていることから、本申請地においても遺構は良好に残っていることが予想され保存が必要と判断した。申請者と埋文1課で協議を重ねた結果、記録保存のため発掘調査を実施することで合意した。その後、事業者である株式会社ティップネスと委託契約を締結し、平成19年9月19日から同年11月22日まで発掘調査を実施した。整理作業と報告書の刊行は平成20年度に行った。

調査番号	0735	遺跡略号	ART-226
調査地地籍	早良区小田部2丁目139他	分布地図番号	原82
開発面積	3148.25m ²	調査実施面積	810m ²
調査期間	2007.9.19～2007.11.22	事前審査番号	18-2-615

2. 調査の組織

調査委託：株式会社ティップネス

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

調査総括：埋蔵文化財第2課 課長 力武卓治（前任） 田中壽夫（現任）

調査第1係長 杉山富雄

調査庶務：文化財管理課 管理係 井上幸江

事前審査：埋蔵文化財第1課 事前審査係 蔵富士寛（前任） 阿部泰之（現任）

調査担当：埋蔵文化財第2課 調査第1係 今井隆博

調査作業：網田美代野 倉光京子 小柳和子 高橋茂子 富永道儀 中園輝夫 中園登美子

鍋山千鶴子 西藤勝喜 平田政子 宮原邦江 森山早苗 柳井順子 山田ヤス子

横溝恵美子 吉田一寛 吉田勝善 吉安秀三 和田裕見子

整理作業：柴田加津子 萩本恵子

なお、発掘作業から報告書作成に至るまで、株式会社ティップネスの方々をはじめ地域住民等関係各位には多大な御協力と御理解を頂きました。記して感謝する次第です。

第2章 遺跡の立地と環境

有田遺跡群は、福岡市の西南部に位置する早良平野に所在する遺跡である。この早良平野は早良区と西区の東半分に広がり、平野の西側は飯盛山から長垂丘陵、東側は油山山塊、南側は背振山系によって画され、北は博多湾に面している。平野の中央を室見川が北流し、これと十郎川・名柄川・金屑川・稻塚川などの沖積作用により平野が形成されている。また室見川河口両岸には愛宕山、五塔山、龜原山などの第三紀の独立丘陵が存在する。海浜部には博多湾の左転海流により形成された弓状砂丘が存在する。

有田遺跡群は早良平野の中央やや北寄りに位置し、標高15m前後を測る独立中位段丘上にある。この台地は阿蘇火山灰に由来しており、下層より八女粘土層、鳥栖ローム層、新期ローム層の層序をなしている。台地の規模は南北約1.7km、東西約0.8kmを測る。この段丘は室見川や金屑川による浸食を受け、北に八手状に広がる独特な形狀を呈している。北は室見川の河口に近く、古くは小田部近くまで海岸が入り込んでいたことが想定される。南側は水田が作られ、台地最高所との比高差は7~8mを測る。

本遺跡群の発掘調査は区画整理事業に伴う1967年の九州大学による調査を端緒とし、1975年以降は本市教育委員会による緊急調査を主体に、現在まで220数次にわたり実施されてきた。ここでは有田遺跡群の時期毎の概略を記す。

有田遺跡群は台地上に広く分布する旧石器時代から近世までの複合遺跡である。上述した新期ローム層には旧石器時代遺物が含まれることがあるが、中世以降の削平により遺存状況は悪く、出土数は多くはない。第6次調査などでナイフ形石器・ポイントが出土している。

縄文時代には有田地区の西側において環状に配される中期~後期の貯蔵穴群を検出している。また、本遺跡群南西の沖積地に立地する第62次調査地点（有田七田前遺跡）では多量の刻目突帯文土器と大陸系磨製石器や無文土器が出土している。

弥生時代初頭のV字溝は谷を取り巻くように巡り、長径300m、短径200mの環濠になる。前期後半の集落は台地中央上に検出され、この時期の溝は有田地区では台地縁辺を取り巻くように巡る。この時期の墳塚墓から細形銅戈が発見されている。また、小田部地区から細形銅矛の出土も伝えられる。中期には青銅器の鑄型や銅鏡・広形銅戈の出土もあることから拠点的な集落の存在が考えられる。

古墳時代の住居址は台地上に広く検出されており、長期間にわたった集落が各所に存在している。この時期には台地北東部に大型の円墳が造営される。

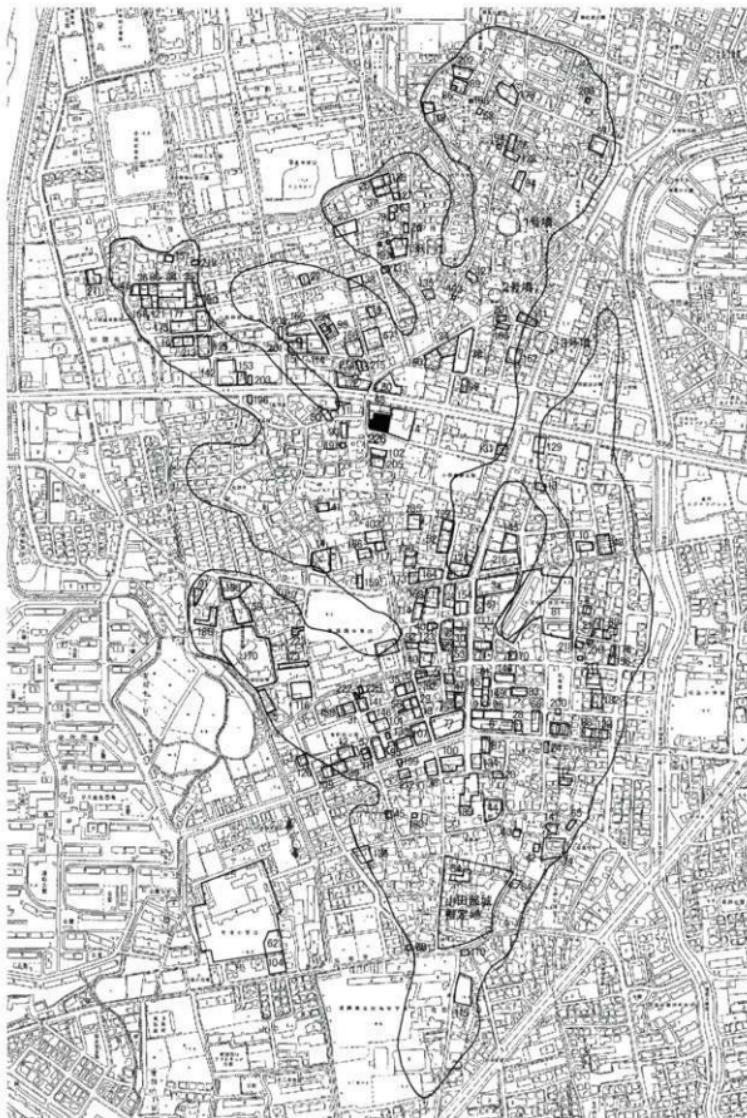
古代にはこの地区が早良郡田部郷に比定されるが、大型の柱穴をもつ建物群は有田地区に集中し、倉庫や居住的な建物を検出している。また、これらの建物群は、古代官道の額田駅が西方約2kmに位置することを考慮すれば郡衙などの官衙規模の建物群と考えられる。

中世には西に下山門荘、南に野芥荘が存在し、当該地域には名主屋敷が形成される。後半には大内氏の早良郡代大村興景の知行地や、大友氏の被官であった小田部氏の里城「小田部城」などが存在する。有田地区で検出した幅5mを測る空濠はL字形、コの字形の郭を形成しており、範囲は約200m四方に及ぶ。大内氏関係の遺物や中国明代、李朝の陶磁器が出土しており、16世紀前~中頃の築城を考えることができる。中世の博多が貿易港として栄えたことや大内氏の朝鮮貿易とも関わっており、中国陶磁器や朝鮮陶磁器の出土が著しい。

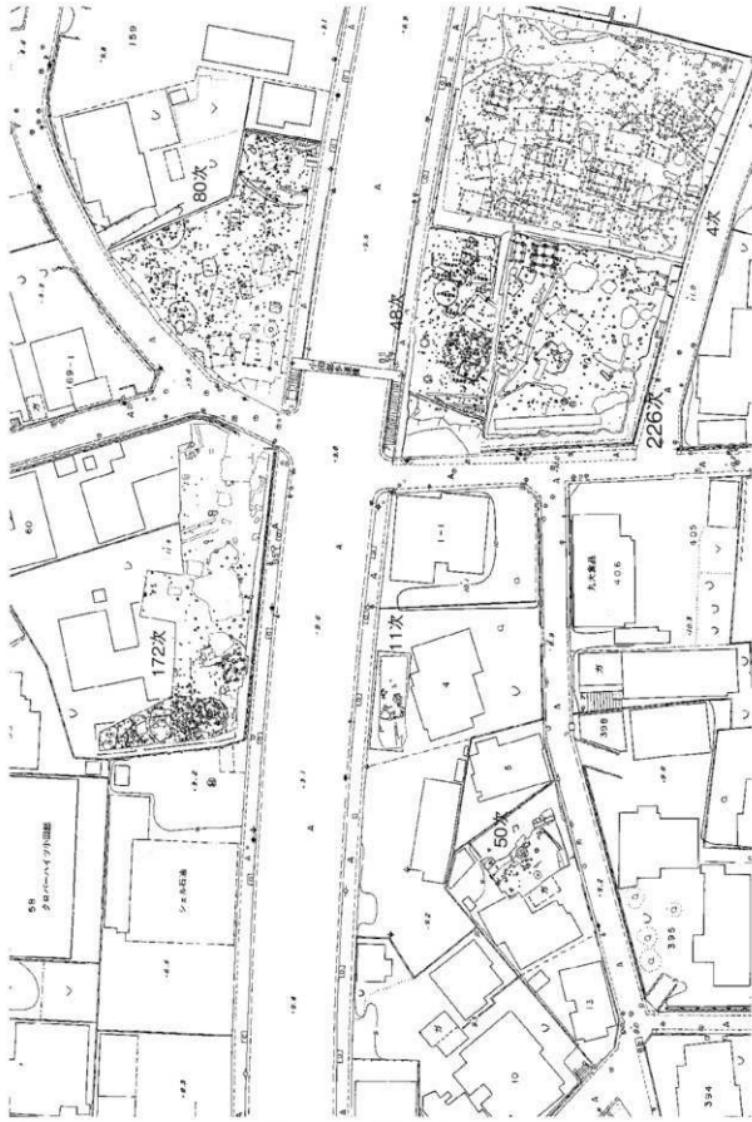


1. 有田遺跡群 2. 元寇防堀 3. 藤崎遺跡 4. 西新町遺跡 5. 五島山古墳
6. 下山門乙女田遺跡 7. 梱六町平田遺跡 8. 福重稻木遺跡 9. 橋本一丁田遺跡 10. 橋本榎田遺跡
11. 戸切遺跡 12. 原遺跡 13. 原東遺跡 14. 飯倉遺跡 15. 次郎丸高石遺跡
16. 免遺跡 17. 野芥遺跡

第1図 有田遺跡群と周辺の主な遺跡 (1/25000)



第2図 有田遺跡群調査地点位置図 (1/8000)



第3図 調査区位置図 (1/800)

第3章 調査の記録

1. 調査の概要

今回の調査地点は有田遺跡群の北側、台地が八手状に分岐する付け根付近に位置する。申請地は国道202号線バイパス沿いに位置し、調査前は宅地であった。調査地点は道路より15mほど高く、周囲の地下げにより島状に残った部分である。周辺には東隣の4次地点、北側の48次、80次、172次地点、南側の102次、205次地点などがあり、調査の多い地区である。北側に隣接する第48次調査では、弥生時代前期から中期の住居址や貯蔵穴、掘立柱建物を検出している。住居には松葉里型住居が見られる。国道202号バイパスの北側には第80次地点があり、弥生時代の住居址、貯蔵穴、古墳時代～中世の溝、古代～中世の掘立柱建物、中世の土壙墓、火葬墓が検出されている。東側に隣接する第4次調査では、古代～中世の掘立柱建物や溝、製鉄関連遺構が確認されている。また、表探であるが旧石器時代遺物が1点出土している。本調査地点より50mほど南の第102次・第205次地点では、古代の柵列及び大型倉庫が検出されている。第205次地点においては弥生時代前期～後期初頭の甕棺墓・木棺墓も検出されている。

本調査は重機による表土剥ぎから開始した。申請地内には廃土置場として利用可能な空間が十分にあったため、一度に全面を調査することができた。現地表面より厚さ10~60cmの客土を除去するとロームを検出し、この面を検出面とした。標高はおよそ11mである。検出した遺構は堅穴住居址4基、土坑2基、掘立柱建物9軒、ピット多数である。住居址は方形プランで小型のもの3基、やや歪んだ大型のもの1基である。掘立柱建物9軒のうち、5軒は調査区北東部に集中しており、主軸もほぼ共通している。第48次調査では本調査区内を一部調査しており、その際2基の甕棺が確認されている。今回その周辺を精査したが、新たな甕棺は検出されなかった。東隣の第4次調査で旧石器時代遺物が出土していることから、調査終了間際にロームにトレンチを入れたが、遺物は出土しなかった。出土遺物は非常に少ないが、弥生土器、土師器、須恵器が出土しており、弥生時代～古代を中心とするものと思われる。遺物は総量でコンテナケース3箱分である。

2. 遺構と遺物

①掘立柱建物（SB）

SB01（第5図、図版2-1）

調査区中央北寄り付近で検出した1間×1間の掘立柱建物で、2.8m×3.3mを測る。柱穴の直径は50cm前後で、覆土は黒褐色土である。深さ50cm前後で、遺存状況は比較的良好である。SP25より弥生土器が出土した。

出土遺物（第8図）

1はSP25より出土した弥生土器甕の口縁部である。逆L字形の口縁部で、復原口径26.0cm、残器高6.4cmを測る。摩滅のため調整は不明瞭である。

SB12（第5図、図版2-2）

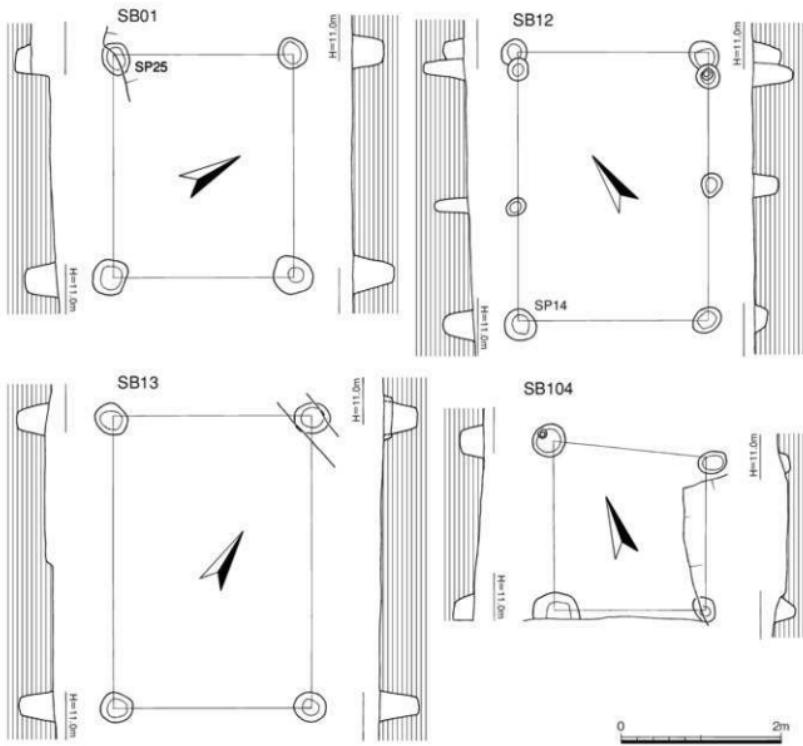
調査区中央付近で検出した1間×2間の掘立柱建物で、2.7m×3.8mを測る。柱穴の大きさは30~40cm、深いものは50cm前後である。柱穴からは弥生土器・須恵器が出土している。

出土遺物（第8図）

2は弥生土器の壺口縁部である。外面には丹塗りを施す。摩滅が著しいが、内外面ともにナデ調整である。



第4図 調査区全体図 (1/150)



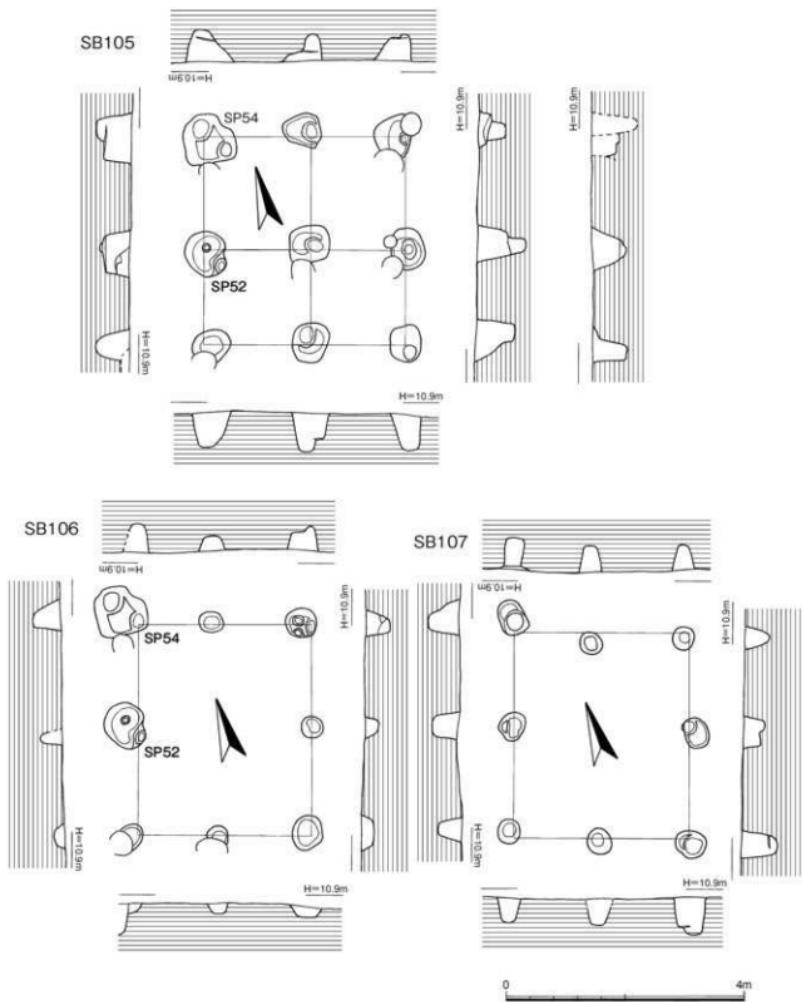
第5図 SB01・12・13・104 実測図 (1/60)

SB13 (第5図、図版2-3)

SB12の北側で検出した1間×1間の掘立柱建物で、3.0m×4.0mを測る。柱穴の大きさは40cm前後、深さは50cmほどである。柱痕は確認できなかった。柱穴からは固化困難な土器小片が出土したのみである。

SB104 (第5図)

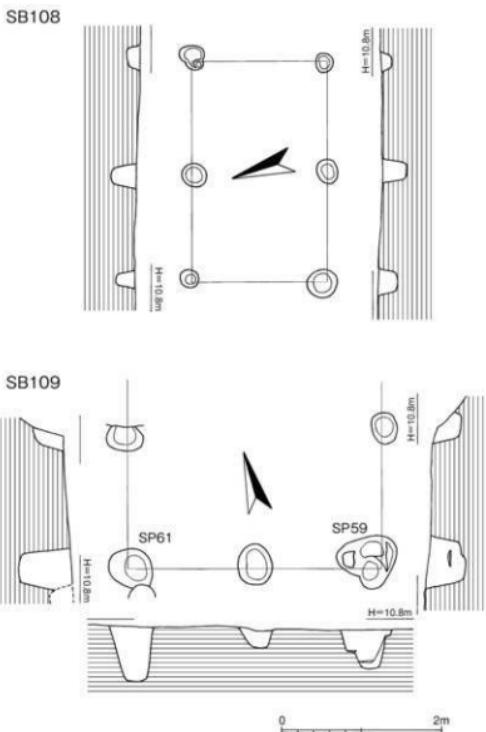
調査区南東端で検出した1間×1間の掘立柱建物で、2.3m×2.3mを測る。柱穴の大きさは30～50cm、深さは20～30cmである。柱痕は確認できなかった。柱穴からの出土遺物はない。



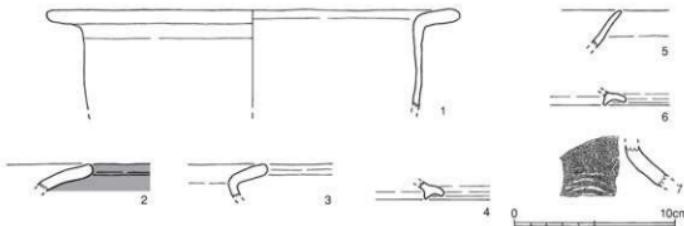
第6図 SB105・106・107実測図 (1/80)

SB105 (第6図)

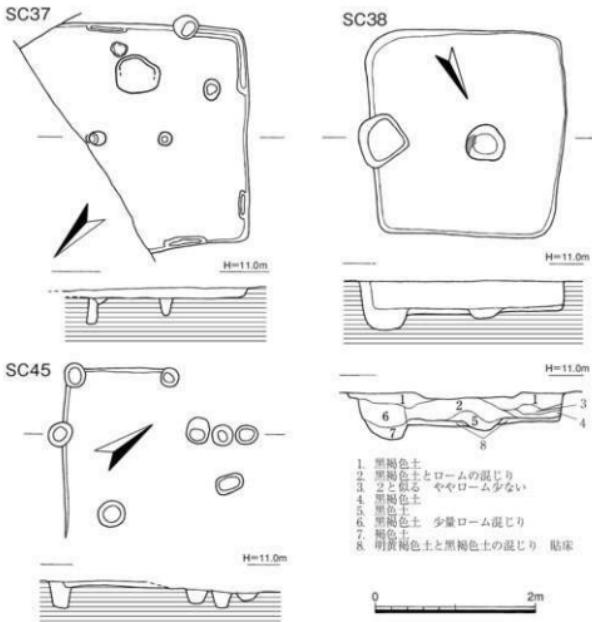
調査区北東端で検出した2間×2間の総柱建物で、4.0m×4.2mを測る。SB106・107と重なっているが、建て替えによるものと思われる。SB106の柱穴に切られる。柱穴の大きさは50cm前後、深さ50cm前後のものが多い。SP52及びSP54は調査現場ではひとつの中柱穴として掘削しているが、整理段階においてSB105とSB106の柱穴が重なっている可能性に気付いた。そのため両柱穴から出土した遺物はSB105・106のどちらに伴うものかは不明なため、ここでは便宜的にSB105で報告する。柱穴からの出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器・石錘である。小片が多く、図化できたものはわずかである。



第7図 SB108・109実測図 (1/60)



第8図 掘立柱建物出土遺物実測図 (1/3)



第9図 SC37・38・45 実測図 (1/60)

SB106 (第6図)

SB105を切る2間×2間の掘立柱建物で、2.6m×3.0mを測る。SB107に切られる。SB105に比べて柱穴は小さく、径30～40cmのものが多い。出土遺物はSB105で報告したSP52・54出土遺物以外は土器片少量のみである。

SB107 (第6図)

SB106を切る2間×2間の掘立柱建物で、2.7m×3.0mを測る。柱穴の大きさは30～40cm、深さは40cm前後である。柱穴のひとつはSC38の覆土に掘り込まれている。柱穴からの出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器で、図化困難な小片のみである。

SB108 (第7図)

SB105～107の北側で検出した1間×2間の掘立柱建物で、2.0m×3.1mを測る。SB109を切る。柱穴の大きさは30cm前後、深さは10～30cmである。柱穴からの出土遺物は摩滅の著しい土器・須恵器で、図化困難な小片である。

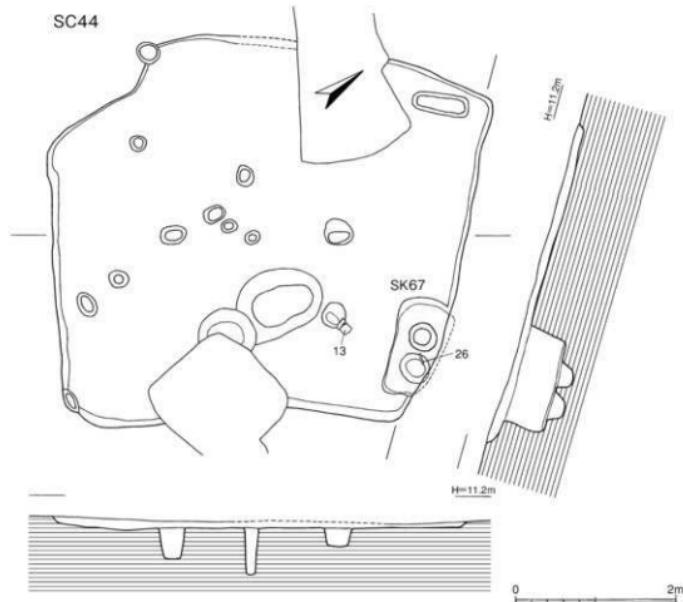
SB109 (第7図)

SB108に切られる2間×2間以上の掘立柱建物である。調査区外に広がるため規模は不明である。柱穴は径50cm前後のものが多く、遺存状況が良好なものもある。柱穴からの出土遺物は土師器・須恵器である。

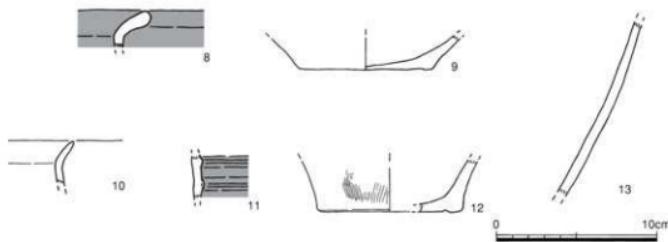
出土遺物(第8図、

第14図)

3は弥生土器窓の口縁部で、くの字状に屈曲する。SP54からの出土である。4は須恵器窓蓋の端部である。内面にはかえりを持つ。24は石錘で、約1/3を欠失する。石材は砂岩で、現存長7.8cm、幅5.9cm、厚さ1.9cm、重さ113.03gである。3ヶ所に紐掛けの打ち欠きがあり、その打ち欠き部には不明瞭ながら紐擦れ痕が認められる。4・24はSP52からの出土である。



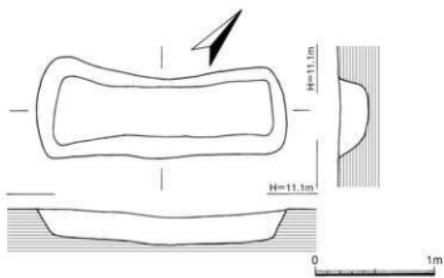
第10図 SC44 実測図 (1/60)



第11図 堪穴住居址出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物（第8図）

5は土師器杯の口縁部片である。内外面ともにヨコナデを施す。SP61からの出土である。6は土師質の壺蓋口縁部、7は須恵器甕の肩部である。内面には当て具痕が残る。とともにSP59からの出土である。



第12図 SK09 実測図 (1/40)

②堅穴住居址 (SC)

SC37 (第9図、図版3-1)

調査区北東で検出した、1辺28mの方形住居である。約1/3は削りとられ、深さも15cm前後で遺存状況は悪い。壁際では部分的に壁溝の痕跡を検出した。中央に2本の柱があり、主柱穴と思われる。出土土器は小袋1袋分で、小片ばかりである。須恵器は含まれていない。その他に石皿が1点出土している。

出土遺物 (第11図、図版6)

8は弥生土器壺の口縁部である。小片のため口径は復原していない。外面に丹塗りの痕跡が見られる。9は壺の底部で、復原底径9.0cm、残存器高2.2cmを測る。28は東壁際で出土した砂岩製の石皿である。写真のみを掲載した。長軸19.2cm、短軸18.2cm、最大厚5.5cmである。

SC38 (第9図、図版3-2、3)

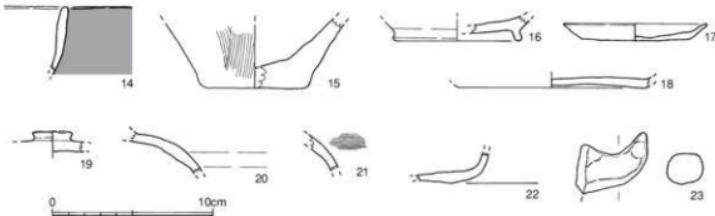
SC37の東側で検出した、1辺2.5mの方形住居である。深さ30cmと遺存状況は良い。覆土は黒褐色粘質土を主体とする。床面には貼床を施し、中央に炉が設けられている。炉の周囲には赤変した部分が見られる。床面を精査したが主柱穴は確認できなかった。住居埋没後にSB107の柱穴が掘り込まれている。東壁際のピットは付属施設とも思われたが、ベルト土層より埋没後に掘り込まれた柱穴と考えた。出土遺物は非常に少なく、小片ばかりで時期決定が困難である。須恵器は含まれていない。

出土遺物 (第11図)

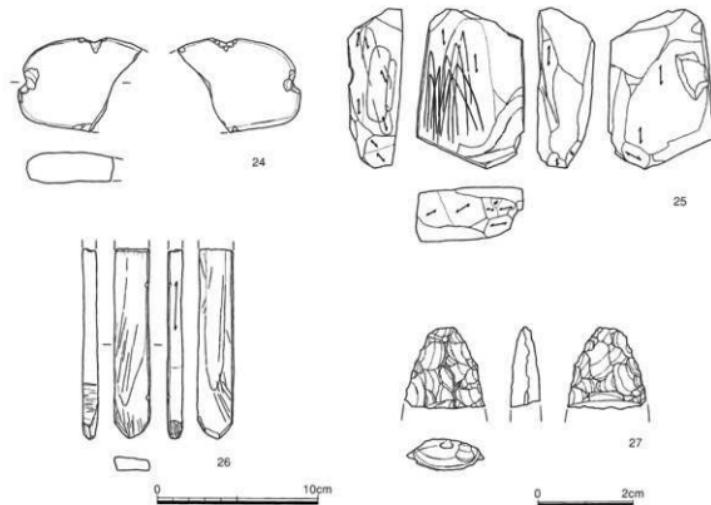
10は甕口縁部の小片である。摩滅が著しく、調整不明瞭である。

SC44 (第10図、図版4-2)

調査区中央付近で検出した、やや歪んだ長方形住居址である。規模は約4m×5mで、歪んだ形態から当初は2軒の切り合いかと思われたが、重複の痕跡は認められなかつたため1軒の住居と判断した。床面からの高さは10~20cmで遺存状況はよくない。中央に並ぶピットが主柱穴と思われる。北東隅には1.3m×0.6m、住居址床面からの深さ50cmの長方形の屋内土坑 (SK67) があり、その中に径約30cmのピットが2つ並んでいる。遺物は小片ばかりで時期が決定し難い。屋内土坑からは砥石が1点出土している。



第13図 ピット出土遺物実測図 (1/3)



第14図 出土石器実測図 (1/3、1/1)

出土遺物（第11図、第14図）

11は弥生土器壺の胴部である。外面には丹塗りを施し、二条の三角突帯の痕跡がわずかに残っている。12は弥生土器壺の底部である。平底で復原底径9.0cm、残存器高3.3cmを測る。外面はタテハケ、内面にはヨコナデを施す。13は覆土上層でまとまって出土した壺の胴部である。特徴的な部分がなく平坦な部位のため傾きは不確実である。摩滅のため調整は不明瞭である。27は覆土上層から出土したもので、黒曜石製槍の先端部である。現存で長さ1.7cm、幅1.7cm、厚さ0.65cm、重さ1.48gを測る。当初は打製石鏃と考えたが、両面の大きめな押圧剥離、石鏃に比べて厚いこと、先端に表皮を残し銳利でないこと、全面最高部に強い摩滅があることなどから石槍と考えた。26は屋内土坑から出土したもので、凝灰岩製の携帯用砥石である。基部を破損している。現存長11.9cm、幅2.2cm、厚さ1.0cm、重さ45.06gを測る。表、裏、右面を砥面とし、左側先端には深い線状痕が認められる。先端は研磨により三角形状に仕上げる。

SC45（第9図、図版5-2）

調査区東端で検出した、1辺2.2m以上の方形住居である。遺存状況は非常に悪く、南西隅の角を検出したのみである。SC37・38と同規模の住居であろうか。壁際にいくつか柱穴が並ぶが、この住居に伴うものは不明である。遺物は出土していない。

③土坑（SK）

SK09（第12図、図版5-3）

SK09は調査区南西部で検出した、長さ2.1m、幅0.8mの長方形土坑である。深さは約25cmを測る。土壤墓の可能性もあるが、出土遺物が黒曜石剥片1点のみではっきりしない。

④ピット出土遺物（第13図、第14図）

14はSP99より出土した弥生土器鉢の口縁部である。外面には丹塗りを施す。15はSP52より出土した弥生土器壺の底部である。底部は平底で、外面にはタテハケを施す。16はSP34から出土した高台付壺である。復原底径8.0cm、残存器高1.5cm。17は土師皿で、口径9.0cm、器高1.1cm。底部はヘラ切りである。18は土師器壺の底部で、復原底径12.0cm。底部外面はヘラ切りで、板状圧痕と思われる段がついている。17・18はSP101からの出土。19・20は須恵器壺蓋である。19はSP26からの出土で、頂部にはつまみがついている。21は器種不明の須恵器片である。横方向にカキメが見られる。SP72からの出土。22は須恵器壺身の破片であろうか。SP82からの出土。23は把手である。SP73より出土した。25はSC38を切るSP103から出土したシルト岩製の砥石である。長さ10.0cm、幅6.7cm、厚さ3.2cm、重さ275.59gを測る。正面、左面を生たる砥面としている。正面は浅い線状痕の集積からなる凹部と深い線状痕が見られ、左面は浅い線状痕と深い凹部からなる。下部面、右面、背面は砥面を持たず、砥石自体の成形のための線状痕、研ぎ痕、摩滅が認められる。

⑤出土石器について

本調査区においては玄武岩、砂岩、黒曜石などの石器、剥片が35点出土した。住居址、掘立柱建物出土の石器4点は既に報告したが、ここではそれらを含めた数量を提示する。

石器の内訳は、砂岩製石皿1点、砂岩製石錘1点、砥石3点（凝灰岩1点、シルト岩1点、砂岩1点）、玄武岩片（石斧？）4点、黒曜石製石槍1点、黒曜石使用痕剥片3点、黒曜石残核5点、黒曜石剥片17点である。特徴としては黒曜石剥片が小型である点が挙げられる。剥片のうち最も長いものでも2.9cmであり、剥片剥離技術が衰退した段階のものと思われる。また、黒曜石は、不純物を含むものも少量見られるが、黒色の比較的良質のもの、いわゆる腰岳産黒曜石が多い。玄武岩片は風化が著しく、石器か否かの判断がつかないものが多い。

第4章　まとめ

今回の調査では弥生時代から古代にかけての集落を検出した。周囲より高く残っていたことから遺構の遺存状況は良好かと思われたが、住居址の深さから判断するとかなりの削平を受けているようである。本調査区で検出した堅穴住居址はいずれも出土遺物が少なく時期が決定し難い。小型の方形住居であるSC37・SC38と類似した形態・規模の住居址は北側の48次・80次・172次調査で検出されている。48次の住居址は弥生時代中期の円形住居に切られていることから弥生時代前期、80次の住居址は出土遺物より弥生時代前期、172次の住居址は出土須恵器より古墳時代後期となり、形態だけでは時期を決定できない。172次の方形住居は竈を持つが、本調査のSC37・SC38は竈を持たず須恵器も出土しないことから、弥生時代中期～古墳時代後期以前としておく。SC44は歪んだ方形で、ベッド状遺構も竈も持たない。弥生土器が少量出土しているが、遺構の時期を示すものは不明である。有田跡跡群の堅穴住居址の調査例を参考にすると、古墳時代中期に相当するであろうか。

調査区北東で検出した掘立柱建物群はわずかに主軸を変えながら重なっており、ほぼ同規模であることから建て替えによるものと思われる。柱穴の切り合いでSB105→SB106→SB107の順が読み取れる。SB107はSC38を切ることから、掘立柱建物群は隣接する堅穴住居址群に後出す。掘立柱建物はいずれも主軸がほぼ共通することから、比較的まとまった時期のものと思われる。掘立柱建物からの出土遺物も非常に少ないが、かえりを持つ須恵器壺蓋の出土より7世紀前半頃と考える。東側の4次調査では古代～中世の掘立柱建物が検出されているが、本地点の掘立柱建物群と主軸の共通するものは同時期の建物の可能性がある。

図 版



1. 調査区東半全景（北より）

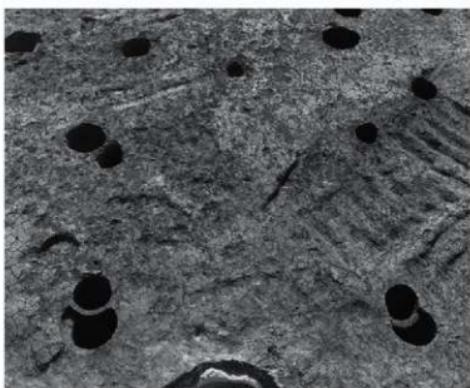


2. 調査区西半全景（北より）

図版 2



1. SB01 完掘状況（北より）



2. SB12 完掘状況（北より）



3. SB13 完掘状況（北西より）



1. SC37 (東より)

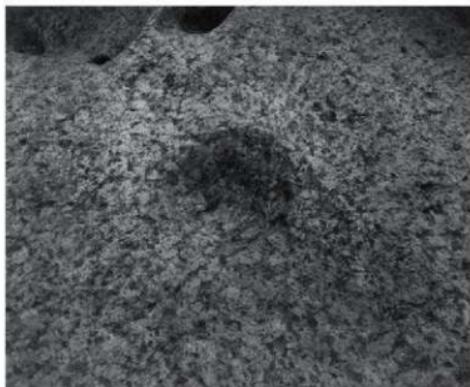


2. SC38 ベルト土層 (北より)



3. SC38 貼床検出状況 (北より)

図版 4



1. SC38 炉（西より）



2. SC44 完掘状況（南東より）



3. SK67 ピット検出状況（南より）



1. SK67 完掘状況（南より）

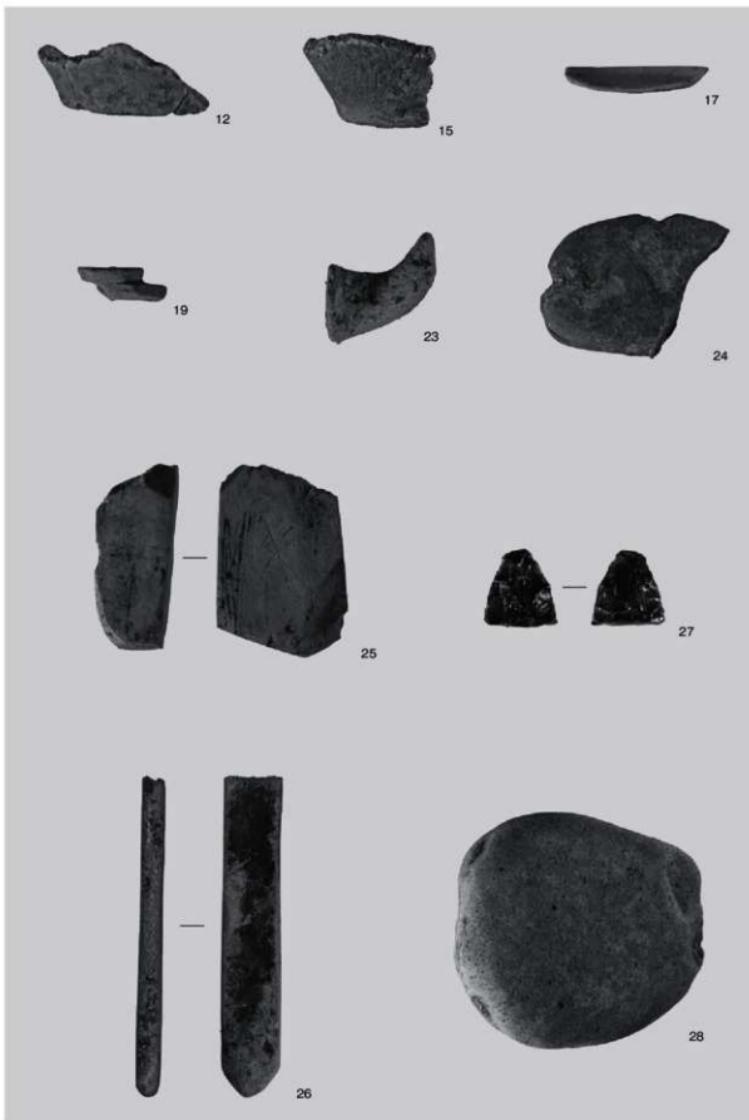


2. SC45 完掘状況（南より）



3. SK09 完掘状況（北西より）

図版 6



出土遺物（縮尺不同）

報告書抄録

ふりがな	ありた・こたべ 46			
書名	有田・小田部 46			
副書名	第 226 次調査報告			
巻次				
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書			
シリーズ番号	第 1024 集			
編著者名	今井隆博			
編集機関	福岡市教育委員会			
所在地	〒 810-8621 福岡市中央区天神 1-8-1			
発行年月日	2009 年 3 月 31 日			
調査期間	2007 年 9 月 19 日 ~ 2007 年 11 月 22 日			
調査面積	810m ²			
調査原因	建設工事			
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(世界測地系)
有田遺跡群 第 226 次	ふくおか市・福岡市早良区 小田部 2 丁目 139 他	40137	0309	33° 34' 04" 130° 20' 01"
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
有田遺跡群 第 226 次	集落	弥生 古墳 古代	掘立柱建物 9 堅穴住居址 4 土坑 1	弥生土器 石器 土器 須恵器
				特記事項
				弥生時代から古代の集落を検出。調査区北東部では建て直しと思われる掘立柱建物群を検出した。

有田・小田部 46

—第 226 次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1024 集

2009 年（平成 21 年）3 月 31 日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神 1-8-1
(092) 711-4667

印刷 福岡印刷株式会社
福岡市博多区東郡河 1 丁目 10 番 15 号
(092) 451-0027